

営農だより



水 稲

間もなく始まる収穫

えびいも



<<<安全・安心な農産物生産は生産者の責任として>>>

農産物の農薬使用状況は、専用の帳簿（用紙）に記録し開示（提出）出来ることが必要です。京都府のブランド認証野菜は、記録の提出と記載内容の確認を行っています。他の出荷野菜も出荷先から記録有無・点検の結果証明を求められる事例が増加しています。更に、残留農薬検査にあつては、検査機関から検査に際し、記録の提出を要求されます。速やかな提出が信頼につながります。

掲載内容について、ご不明の点は最寄りの支店営農担当・営農経済センター
または、本店 営農部営農指導課へお尋ね下さい。



営農部 営農指導課

TEL (0774) 62-5890 FAX 62-9450

北部営農経済センター

TEL (0774) 64-7200 FAX 64-7205

南部営農経済センター

TEL (0774) 76-0003 FAX 76-0005

水 稲

ヒノヒカリの収穫期を迎えて

今年は、35℃超えの猛暑は8月上旬だけで、その後は大雨や曇雨天が続き、8月6半旬の出穂期のみ晴天となりました。9月前半も雲の多い日や降雨が多く、近年のような暑い日は少なめで、日照も稲の登熟にはやや少なめですが、大きな災害もなく10月を迎えようとしています。

ヒノヒカリの刈取期は例年より若干遅れる見込みですが、適期刈取りを心掛けましょう。

◆ 落 水

落水は、刈取作業に支障がなければ刈取の7日前頃を目安とします。乾き過ぎは籾の実入りを悪くします。田の状況を見ながら判断して下さい。



◆刈取前の圃場点検

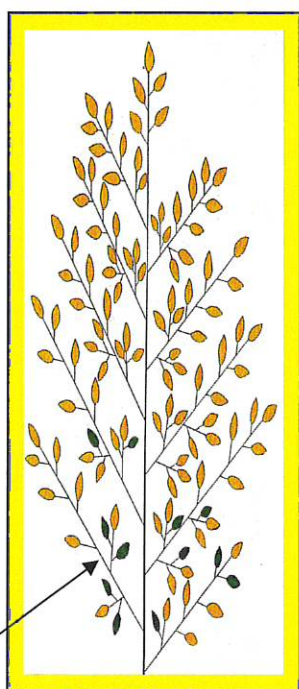
玄米への異物混入は出荷販売後のクレームに繋がります。コンバイン作業時に缶、ペットボトル、木片等の巻き込みが異物混入の原因になります。道路や水路沿い・水口付近は、あらかじめ見回って除去し、混入事故を防止して下さい。

また、各作業時の砂礫の混入やクサネム等の雑草が多い田では、雑草種子の混入にも注意しましょう。

◆ 刈取適期

ヒノヒカリ刈取適期は、出穂後43～47日が基準で天候と肥の効き具合により数日ズレを生じます。

塗つぶし籾はわずかに黄熟していない籾



従って、穂と籾の状態を観察して刈取り適期を逃さないように判断します。

収穫適期は、穂の籾全体がほぼ黄熟し、穂首の近くにわずかに青味の残る（青籾よりも黄化の進んだ）籾が10%程度残る時期です。

◆ 適正な籾管理と乾燥

生籾はコンバイン刈取後4時間以上放置すると発酵し始め、着色粒や破碎粒を生じるなど米質低下を起こしやすくなります。

刈取後は、すみやかに通風又は乾燥行程に移れるよう乾燥機等の能力に合わせて刈取りましょう。

乾燥開始後の追加張り込みは乾燥ムラを生じて水分過多の要因となりやすいため行いません。

乾燥仕上り籾の水分は、**14.5%を目標**として**15%未満**に乾燥し、籾が冷めてから再度水分確認をしてください。15%超は水分過多です。

◆ ^{もみすり} 籾摺・調製

籾摺は、乾燥後籾が冷めてから行い、胴割れ、肌ずれを防止しましょう。

ロールの間隙（間隔）の不適正や劣化は肌ずれの原因となります。籾摺量に応じて点検、調整・整備し、適正運転に心がけてください。

ライスグレーダー（米選機）は米粒の大きさに適合した網目（ヒノヒカリは1.8mm）を使用し、整粒歩合の向上に努めてください。

30.5kg／袋（風袋込み）に計量します。

袋詰めは適正量目を確保してください。

◆ 生産履歴

農薬の使用状況の記帳は生産者の義務ですので、出荷日より早めに作成・点検の上、出荷当日までに提出されますようお願いします。

現在の農薬残留規準制度実施以降、当JAでは、残留農薬の検出事案を起こすことなく米の取り扱いを続けることができています。

野 菜

露地・ハウス野菜の栽培管理

今年の夏は寒気と暖気の境界が日本列島上に居座り、高温日は少なくなりました。山城地域は大きな災害もなく9月を終えました。露地野菜では気温が低下する前に必要な生育を確保することが重要です。稲収穫後、速やかに耕耘と畝立てを行い作付けます。また、ハウストウガラシの後作のみず菜・菊菜の栽培についても、計画的に進めましょう。果菜類は気温が低下するのでハウスの温度管理と整枝・剪定、摘葉と採光など栽培管理の両面の注意が必要です。

◆キャベツ・ハクサイ

年内収穫のものは9月～10月初めまでに定植と1回目の追肥を済ませ、結球前には窒素、加里成分を追肥して生育の確保を図って下さい。

9月に発生したヨトウムシ等の防除もれがあれば、早めに確実な防除をしましょう。

また、雨が多かったので、軟腐病、べと病、白斑病、黒腐病の発生にも注意が必要です。

表 1 キャベツ・ハクサイの主な適用農薬

農薬名	病害虫名
アディオン 乳	アオムシ アブラムシ類 コナガ ヨトウムシ
ア ニ キ 乳	アオムシ コナガ ハイマダノメイガ シンクイムシ
トレボン 乳	アブラムシ類 コナガ ヨトウムシ アオムシ
プレバソン ⑦5	アオムシ コナガ ヨトウムシ カブラハバチ
アミスター20 ⑦	黒斑病 (べと病) (白斑病) (白さび病)
コサイド 3000	斑点細菌病 軟腐病 黒腐病
ダコニール 1000	べと病 白斑病 (白さび病)
プロポーズ顆水	べと病 (黒斑病) (白斑病) (白さび病)

◆ダイコン (表1のプロポーズを除き適用有)

間引き後には株元に少し土寄せを行い倒れないようにしましょう。1回目の追肥は本立て時に燐硝安加里1号を20kg/10a、その後生育状況を見て1～2回(1回40kg/10a)施し中耕、土寄せを行います。その後、生育状況を見ながら1～2回同量の追肥をします。

◆ ハウス抑制キュウリ

ハウス栽培では、気温の低下とともに果実の肥大も遅くなり、収穫量が減少するので、適確な管理が重要です。肥切れ前に追肥を行い、古葉、側枝を摘み取り、陽当たりを良くします。

また、ハウス内の温度は晴天時の日中は高温になりますが、夜間は冷込むのでサイドの開閉や二重カーテン等で適正な温度管理に努めます。

果菜類の温度不足は、生育や病害の発生に影響します。ハウスの温度管理と栽培管理の両方に気を配りましょう

病害では、低温多湿条件下で菌核病や灰色かび病が発生しやすく、発病適温は20℃前後、特に15℃位の低温で被害が多いとされています。

表 2 キュウリの主な菌核病適用農薬

農薬名	希釈倍率	日数・回数
アフエット ⑦	2000 倍	前日・3回
カンタス DF	1000～1500	前日・3回
ゲッター 水和	1500 倍	前日・5回
ファンジスタ顆水	2000～3000	前日・3回
ベンレート 水	2000～3000	前日・3回

◆ハウスシュンギク (菊菜)の病害虫防除

雑草対策:作付けまでに太陽熱消毒をします。更に、雑草の防止と冬季の低温多湿を避けるため、可能な限りポリマルチを行います。

生育適は15～20℃で10℃以下や28℃以上にならないよう低温時の保温、高温時の換気と遮光に努めます。

害虫被害を少なくするためトウガラシ栽培時と同様ハウスの防虫ネットを活用します。

ネキリムシ、アブラムシ類、ハモグリバエは、作付け時及び生育初期に防除を徹底します。

病害対策として、べと病は多湿、炭そ病は高温多湿を避けるよう特に注意します

表 3 シュンギクの主な適用農薬

農薬名	病害虫名	使用時期
カルホス微粒F劇	ネキリムシ	定植時
ベストガード粒	アブラムシ	定植時
アルバリン顆溶	アブラムシ	収穫前日
カスケード乳	アサミウマ マメハモグリバエ	7日前
モスピラン水溶	アブラムシ	3日前
粘着くん 液	アブラムシ コナジラミ	収穫前日
アミスター ⑦	炭そ病	前日
ストロビー ⑦	炭そ病	14日前
Zボルドー	べと病	—

注 顆溶＝顆粒水溶 劇＝劇物

茶 樹

10月の茶園管理

この夏は真夏に前線活動があり高温強日射も少なく8月中旬には日照不足もありましたが、茶の生育には無難な天候でした。このため、全体的には病虫害の発生は少なく経過しています。越冬前の茶芽の充実対策を適切に行い良好な茶園管理に努めましょう。

◆ 秋の整枝作業

(1) 時 期

秋整枝の適期は、平均気温が18℃以下に下る時期の9月末～10月中旬となります。近年では初茶の摘採を早めるため、秋整枝を9月中旬頃に早める茶園も見られますが、摘採後に高温に推移すると再萌芽する危険性があります。

この場合、初茶の摘採期は早まりますが低温障害を受ける危険性も高まります。整枝時期の判断は気象情報に十分注意し慎重に計画を立ててください。

(2) 整枝の深さ

秋整枝は生育状況を見て摘採場所を決めて下さい。秋整枝の深さと時期は翌年の初茶に影響します。樹勢の良好な茶園は三番茶芽を1～1.5葉残す位置で行います。葉層が確保できない場合は浅めの摘採としてください。

◆ 施肥時期と分施

肥料成分を効率良く茶樹に吸収させるには、茶樹の養分吸収状況に合わせて分施します。

表4 年間施肥割合 (%)

時期 肥料	秋肥 9上中	春肥 4上中	夏肥 1茶後	夏肥 2茶後	合計
窒素	30	30	20	20	100
リン酸	50	50	—	—	100
加里	50	50	—	—	100

秋肥は年間施肥量の窒素30%を目途に施肥してください。一度に多量に施すと根を傷め、寒害の発生要因となりますので、9月上旬～10月中旬までに数回に分け施し終えてください。

また、有機質肥料は肥効が現れるまでにある程度の日数が必要となりますので、根の活動が活発になる10月上旬～11月に肥効のピークが現れるように施肥計画を立ててください。

表5 10月の施肥例 (kg)

肥料 茶種	菜 種 油 粕	まもります 特配合	楽エコ	硫酸 加里
煎 茶	—	200	—	20
かぶせ茶	—	—	100	—
てん茶	300+200	—	80	—
玉 露	300+200	—	80	—

◆ 秋の防除

秋はチャノホソガ、チャノコカクモンハマキ、チャトゲコナジラミ等の最終世代の発生期となります。

この時期の防除は、春の発生源となる越冬量の減少を図るため、防除は丁寧に行い春の一番茶での防除には農薬散布を最小限に抑えられるように努めてください。

◎ チャノホソガ

第4回目の成虫盛期は9月上旬～10月上旬頃で、幼虫の孵化盛期は9月25日頃となるので、発生の多い茶園ではこの前後2回防除します。

◎ チャノコカクモンハマキ

第4回目の成虫盛期は9月中旬～10月上旬頃で、幼虫の孵化盛期は9月下旬～10月中旬頃となるので、発生の多い茶園はこの前後にホソガと同時防除を行います。

◎ チャトゲコナジラミ

発生の多い園では10月上旬と中旬に適用のある農薬でホソガやコカクモンハマキと同時防除と追加1回の防除で効果が認められて

表6 主な防除農薬

害虫名 農薬名	チャノ ホソガ	チャノコカ クモンハマキ	チャトゲ コナジラミ
アグリメック 乳 劇	○	○	○
コ テ ツ ② 劇	—	○	○
ディアナ SC ②	○	○	○
マトリック ②	○	○	—
ランネート 45DF 劇	○	○	○
ロ デ ィ ー 乳 劇	○	○	○

注) ②=フロアブル、DF=ドライフロアブル、劇=劇物